

## 東京で得たもの

私は入学前から、仙台二高には夏休みに東京に行く企画があるということを知っていた。高校一年生や二年生がそんなに早い時期にもうオープンキャンパスや企業訪問をすると聞いたときは、たいそう驚いたものだ。しかし私は、無事仙台二高に合格することができると、入学することに精いっぱいだったため、その先の大学のこと、就職のことは何も考えられなかった。入学から一か月ほどするともう東大見学会・企業大学訪問の参加者が募集された。そのときはまだ、この企画は修学旅行のないこの学校でその代わりをするようなものなのかな、というようにしか思っていなかった。まさか、私にとって自分の将来を考えるうえで重要な経験になるとは思ってもみなかった。

参加を決めて数日後に、初めて参加者のガイダンスが行われた。そこで担当の先生が、2日間の予定を全員に配りながら言った言葉はよく覚えている。「厳しいスケジュールだし、帰ってきたら課題も出る。今行くのをやめたいという人は、全然かまわないよ。」と。私はそのとき少しもやめようなどと思わず、むしろ行きたい気持ちが大きく膨らんで楽しみで仕方がなかった。スケジュールを実際に見たおかげで、その企画がどんなに自分に役に立つものであるかが分かったのだ。何週間にもわたる準備を経て、ついに八月五日、私たちは東京に向かった。

思えば短い二日間だった。しかし、これは今まで私が経験したどの行事よりも充実したものであった。中でも二つの企画が私の心に大きな影響を与えた。

一つは一日目の午後の、企業大学訪問だ。これは、事前に自分の興味がある職業を選び同じ職業ごとに数人のグループに分かれ、みんなで決めた企業に訪問をするというものだった。私は、将来創薬会社に勤めて新しい薬を開発し、病気に苦しむ世界の人々を救いたいという夢があったため、創薬会社を希望した。同じグループのみんなどの話し合いの末、「協和発酵キリン株式会社 東京リサーチパーク」という会社に訪問させていただくことになった。

当日、私たちは大変失礼なことに約束時間にだいぶ遅れて会社に到着してしまった。しかし社員の方々は快く私たちを迎えてくださったので、心が温まる思いだった。会社は大きくきれいで、とても開放感があった。

初めに、社員の方から概況説明をいただいた。協和発酵キリンが創薬会社として世界で九位と聞き、驚くとともにさらに会社に興味がわいた。協和発酵キリンの中でも東京リサーチパークは、創薬に必要な過程の中で初期段階である探索（薬のタネを見つける）を行っていた。私は創薬の仕事についてあまり詳しいとは言えなかったが、話を聞き、創薬には長くて二十年ほどかかり、探索だけでも二～五年はかかってしまうということの方が分かった。創薬とはそれほど根気のいる仕事なのだと思う。

次に社員の方の案内で所内見学をさせていただいた。私が最も興味を持ったのは、社内が社員同士のコミュニケーションを最も大切にする作りになっているということだった。例えば、社内にはいたるところにホワイトボード、机、いすが置いてあった。これは、社員同士が何か会話をしたり、アイデアを出し合ったりしたときにホワイトボードに書き込みなどをして、話を発展させるためだそう。また、オフィスの机の仕切りは議論になり、下を向けば個人の空間、少し顔を上げれば仲間と会話ができる、そんな絶妙な高さを作り出したそう。社員にとってとても居心地のよい、素敵な会社だと感じた。また、建物の隣には大きなテニス場、フットボール場があり、社員の方々はお昼休みや勤務後に汗を流してスポーツを楽しみ、年に何度か近所の方や学生に開放することで、ご近所づきあいにも気を使っているそう。この見学を通して、心から、私もこの会社で働きたいと思った。



最後に研究員の方へインタビューをさせていただいた。私は、「どのような性格の人が創薬会社で働くのに向いていると思われるか」という質問をした。自分の将来を考えるうえで最も気になっていたことだったのだ。だが答えは、「多様性、つまり、いろんな人」だった。薬は全世界の人に使われる。だから、様々な患者に対応するために創薬会社にも様々な性格、年齢、考え方をを持った人が必要だという。私は自分が比較的周りに流されやすい性格ではないか思っているの、これからは会社が求める人材になれるように、自分の意思をしっかりと持ち、それを周りに発信していくように心がけようと思った。

今回の企業大学訪問は、私に未来への一つの道を示してくれた。インターネットや本などでも仕事について知ることはできる。しかし、実際に自分の目で見たり聞いたりしたことは他の何にもかえがたく、よりよく学ぶことができるということが分かった。もし今後もこのような企画があったら必ず参加し、自分を成長させる助けにできたらいいと思う。

もう一つ、私に影響を与えたのは、東大見学会だ。東京大学は、日本を代表する大学の一つ。きっと誰もが憧れる大学だろう。自分の成績のことは抜きにして、もちろん私も秘かに憧れを抱いていた。だから、この東京への旅で最も心待ちにしていた企画といっても過言ではない。

まず初めに驚いたのは、その敷地の広さだった。なんと、私たちが訪れた東京大学本郷キャンパスは、子供の夢の国「東京ディズニーランド」よりも、世界一小さな国「バチカン市国」よりも広がったのだ。まるで小さな町のように思った。また並木の横に建ち並ぶ建物は、今自分が日本にいるとは考えにくいほど古風で素敵なので、外国が大好きな私は、道を歩いているだけで心を奪われるばかりであった。他にも、敷地の中にたくさんカフェがあったり、森や池があったりと、高校との規模の大きさの違いを深く実感した。

一通り敷地内を歩いた後、学部見学をした。薬学部の企画と都合が合わず残念ながら参加することができなかったため、医学部や理学部を見学した。医学部では、法医学についての紹介をしていた。医学の歴史や実際に起こった事件の様子を説明するパネルがあり、昔使っていた道具の展示も行われていた。また、理学部では様々な学科に分かれて東大生や先生方が自分の研究について説明をしていた。私は天文学科と生物科学科の説明を受けた。天文学はもともと興味があったのでどうしても行ってみたいと思っていた。宇宙のこと、星のこと、世界にある天文台のことなどを分かりやすく説明していただいたおかげで、さらに興味を持つことができた。生物化学という学問は今までよく知らなかったのだが、私には少し難しい内容に感じた。だが、どの学部の学生の皆さんも、自分が取り組んでいる学問に誇りを持ち、またその学問を好きだと思っているということが感じられたので、とても印象的だった。

今まで想像もしていなかった夢のような東京大学というところが、初めて身近に感じられた経験だった。そして初めて、「私もこの大学に通い、仲間とともに自分の興味がある学問についてとことん学んでみたい。」と思った。きっと、一年生の

うちから参加することができるこのような企画が無ければ、私は自分の将来、それも近い未来である大学のことをこんなにも深く考えることはなかっただろう。

最初は少し気が引けてしまっていた東京への旅だったが、今となっては参加を決意して本当に良かったと思う。様々な出会いや思いがけない経験など、ここに書ききれない、多くのすばらしい思い出が今の私には溢れている。大切にしたい。

計画を立て、引率をしてくださった先生方、本当にありがとうございました。そして、私へ、高い目標は、自分を大きく成長させる。この何にも代えがたい経験を、必ず生かそう。明るく個性あふれる、自分だけのたった一つの未来のために。

